IEEJ: 2015年9月掲載 禁無断転載

特別凍報レポート

## 国際エネルギー情勢を見る目(239)

2015年9月30日

## Sakhalin Oil & Gas 2015 に参加して

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所 常務理事 首席研究員 小山 堅

9月28~29日、ユジノサハリンスクにおいて Sakhalin Oil & Gas 2015 に参加する機会を得た(同会議自体は9月28日~10月1日の開催)。この会議は今回で19回目の開催であり、地元サハリン州政府高官、ロシア連邦政府エネルギー関係者、ガスプロムやロスネフチなどロシアの主要な石油ガス産業関係者、シェル・エクソンモービル等の国際石油会社関係者、日本・中国等のエネルギー関係者が多数参加する会議となった(なお、主催者によれば600名超の参加登録者があった)。会議のテーマが示す通り、開催地サハリンの石油・ガス開発の現状と展望、アジア太平洋市場におけるサハリンの石油・ガスの役割といった点が議論の中心であった。筆者は会議日程の途中で帰国し、全体を通して参加したわけではないが、参加した範囲において印象に残ったポイントをまとめてみたい。

最も印象に残ったのは、サハリンの石油・ガス開発の将来展望に関して、ロシア側関係者に「強気」と「弱気」、「希望」と「不安」が混在・交錯しているとの感を強く持った点である。「強気」と「希望」のサイドに関しては、まずは現状に至るまでの実績・達成が一つの重要な背景となっている。サハリンの石油・ガス開発が本格化してほぼ 20 年、その間、ロシアで最初の LNG 輸出を実現し、原油輸出も大幅に拡大、日中韓など北東アジア諸国におけるロシアのプレゼンスを大きく拡大することにサハリンは著しい貢献をした。また、その石油・ガス開発によって、ロシア連邦及びサハリン州に多額の税収等をもたらし、地元経済の活性化や社会貢献等の面でも大きな成果が上がっている。

この「実績」とそれを可能にした豊富で競争力のある石油・ガス資源の存在はロシア側関係者の強気をもたらす重要な要因となっている。まして、アジア市場で既に一定のプレゼンスを築き上げたところを基盤に、これから更なる発展が期待され、世界の石油・ガス・LNG市場を需要面で牽引するアジア市場への最前線・窓口となっているサハリン地域が意気軒高となること自体は決して不思議ではない。ロシア側関係者が再三言及し、実際に重要な要因である「アジア市場への近接性」という要因は、競合する他の主要な石油・ガス輸出者に対して、ロシア・サハリンに大きなアドバンテージを与えるものである。日本を始めとして、アジアの主要消費国が供給源多角化・中東依存度低減を図り、かつ先行き需要の不透明性から供給の柔軟性をより強く求める方向性にある中、地理的な近接性は潜在的には重要な意味を持ちうる利点である。

こうした観点から、今後の石油・ガス開発とそれによるアジア市場進出拡大に関して、ロシア側に大きな希望・期待と強気の読みがある一方で、今回の会議における議論ではその反対にある「弱気」と「不安」をも様々な形で窺い知ることが出来る機会となった。その原因となっているのは、以下の3つの要因である。

## IEEJ: 2015年9月掲載 禁無断転載

第 1 に、欧米主導の経済制裁の影響がある。ロシア側参加者からは、例えばガスプロムの資機材調達の 9 割は国内からの調達であり、経済制裁による影響は軽微との意見も表明されていたが、興味深いことに会議会場で実施されたインターネットによる会議参加者の投票では、9 割以上の意見として、制裁はサハリンの石油・ガス開発に負の影響をもたらす懸念がある、との回答が示された。仮に全体としての調達に占める割合が低くとも、沖合開発等における鍵を握る部分での調達・技術等に関する影響を懸念する声が反映されたのではないか。また、LNG 開発等を始めとする長期・戦略的な案件に関する制裁の影響も正確に先読みすることは難しく、関係者にとっては不安要素となっているのであろう。

第2に、油価低迷の影響がある。油価低迷とそれをもたらした国際石油市場での需給緩和、また油価低迷によるアジア LNG 市場での価格低迷は、サハリンだけではないが、全体として石油・LNG 開発プロジェクト推進にとって大きなマイナス要因となっている。主要石油・ガス企業が資本支出削減を余儀なくされ、プロジェクトの見直しが喫緊の課題となる中、プロジェクトの経済性・収益性を判断する上で今の市場環境がサハリンの関係者にとっても逆風であること(少なくとも順風でないこと)は間違いない。米国 LNG 輸出の本格化、豪州 LNG プロジェクトの立ち上がり等、競合相手の存在もロシアにとっては気になるところである。しかし、同時に、相対的に経済性に優れるプロジェクトにとっては、この厳しい環境を逆手に様々な競合案件から一歩先んじる可能性も高まるという点もある。その意味では今回の会議では、既存インフラ等の活用が可能な、いわゆる「Brownfield Project」であるサハリン 2 プロジェクトの第3トレイン拡張計画への関心・期待が特に高いとの印象も受けた。その他のプロジェクトの可能性も含め、今後の動向が注目される。

第3に、アジア主要国の需要の先行きに関する不安が存在する。日本についても震災後大幅に拡大したLNG需要を目の前に、日本市場への期待が高まったが、原子力再稼働の先行きと発表されたエネルギーミックス実現動向次第では、LNG需要が低減する可能性もロシア側は認識し始めている。しかし、ロシアにとってより重要なのは、現時点では中国であろう。昨年相次いで発表された「東方ルート」および「西方ルート」による大規模ガスパイプラインによる輸出計画は、東方ルートで一部パイプライン建設着工などの動きはあるが、基本的には当初の期待よりその進展は捗々しくない。加えて本年になって中国経済の成長鈍化が顕在化してくると、中国市場の成長に大きな期待を寄せていたロシアにとっては先行きの不安感が一層高まる状況がもたらされている。

アジア市場への期待が高いことは筆者が参加したセッションの議論でも強く実感したが、経済成長、原子力・石炭等競合エネルギーの動向、競合する LNG プロジェクトの存在、等の要因によってはその期待実現が困難となる可能性も決して否定はできない。そのため、サハリン石油・ガス開発プロジェクトの競争力強化と、販路となる市場・消費国で何が起きているのか、何が求められているのかをプロジェクト関係者が正確に理解し、的確な対応を取る必要がある。

サハリンの石油・ガス資源は、まさにロシア側・供給者側にとっても、北東アジアの消費国・買手側にとっても、Win-Win 関係をもたらしうる貴重な資産である。経済制裁問題を始めとする国際関係・不透明感が高まる世界経済など難しい状況は存在するものの、この貴重な資産の有効活用を図ることは関係者全てにとって重要な課題であり、課題克服のための努力・取組強化が今後とも必要不可欠となろう。

以上